

---

# 交われない僕等

3days

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

交われない僕等

### 【Zコード】

N4889BA

### 【作者名】

3days

### 【あらすじ】

ある変わった青年がいた。ある日、同じ年の青年と出会い、二人は行動を共にする。

初投稿です。他の方々の作品とは比べ物にならない作品かと思いますが読んでいただければ嬉しいです。

携帯のアラームによつて心地よい眠りから無理やり起<sup>レ</sup>された。今は4月上旬まだ気候的にも肌寒く、雄一はベットの中で体を丸くしてうずくまつていた。その状態を10分ほど持続させ、名残惜しくもベットから抜け出した。上下灰色のスウェットを着たままの姿で頭を搔きながら2階から1階へと降りていぐ。そのまま向かうのは洗面所。顔を洗い、歯を磨いた後20畳ほどあるリビングに置いてあるテレビつけて眺める。

これが城山雄一20歳の一日の始まりである。

一通り芸能、スポーツ、経済のトピックスを確認すると電源を落とした。何をしようか、起きてからもう2杯目のブラックコーヒーを飲みながら今日の予定を考える。選択肢は2つほどある。溜め込んである某作家の小説を読み漁るか？それとも久しぶりに外に出るか？どちらも甲乙つけがたい。コップをテーブルに置き、ソファーに座つたまま思案する。結論はほんの2、3分で出た。

颯爽と服を着替えて、家を飛び出そうとするが失念していた。自分の右腕につけている腕時計を確認する。AM7:10。

行き先としては秋葉原に行こうとしている。家から最寄駅に向かうのに約15分。最寄駅から電車を乗り継いでかかる時間は凡そ1時間ぐらいだろう。9時前には十分な時間を残して到着してしまう計算だ。いかんせん早すぎる。しかし、もう家を出発する気は満々だ。

玄関前で腕を組みましても思考を巡らす、結局、普段は朝<sup>レ</sup>はんは食べない主義なのだがファミレスか何か座れる場所でも探し、小説でも読むことにする。時間を気にしながら1時間も過<sup>レ</sup>すのは歯がゆくてたまらない。

さつそく外に足を踏み出すと少し冷たい風が吹いているが空は雲一つ無い晴天で出かけるにはちょうどいい気候だ。ひとまず深呼吸をしてみる。約2週間ぶりの外出だ。新鮮な空気が体に取り込まれるのを感じた。気分は頗る快調だ。

駅までの道のりの途中に聳え立つ急こう配な坂を上り、息切れをしながらも電車内に乗り込む。事故か何かのトラブルも起こらず、予測通り9時前には秋葉原へと到着した。今日は平日だがこの時間から幾分、人が多く感じられる。もっとも頻繁に来る訳じゃないから主観的な意見に過ぎないのだが。ゲームの販売日やイベントでも行われるんだと見当をつけておく。

ひとまず、どこか朝食でも食べれそうな店を探すことにした。うろ覚えだが2~4時間営業のファミレスを思い出しそこに足を向ける。迷うこともなく問題なく到着した。我ながら自分の記憶力に感心する。

店内はサラリーマン辺りがちらほらいる程度で空いている。無難にモーニングセットを注文し、小説を鞄から取り出して読み始める。ちなみに中身は新宿を舞台にした刑事のハードボイルドものである。ドラマ化もしている。ここまで言えば分かる人も多いと思う。

秋葉原にくるだけあってアニメ物も好きだし、ライトノベルも100冊は優に超える数は読破している。ただ今回の目的は別である。

モーニングセットのコーヒーをちびちび口に含みながら本の世界に没頭する。トイレに行きたくなり席を立つと同時に時間を確認。AM10:30。どうも集中しすぎたみたいだ。便所を済ませ足早に店を後にした。店から出ると、大勢の人ばかりができていた。さすが秋葉原だと見当違ひな感心しつつ電器屋を目指す。様々な店舗が乱立し、どこに行こうか迷う。何店舗か梯子するに決めてとりあ

えず近くの電器屋に入るとする。

「これは秋葉原の自然な光景なのだろう。メイド姿の女の子達が声を出してチラシを配つてゐる。一番最初に頭に浮かんだのが短いスカートで寒くはないかだつた。女子はファッショソの為なら寒さぐらい我慢するらしいが、僕の觀念からしたらそこまでする必要もないではと疑問符を浮かべてしまう。風邪を引く可能性を入れて防寒に徹する方がいいと僕なりの主張。女子と面識がほほない僕には分からぬがこの発言は非難の元になるのかも知れない……」。

とまあ1m前方にメイド姿の女の子が立つていた。雄一は彼女の目の前を通つたが、此方に視線を寄せることもないままチラシ配りを続けていた。今のスルーに関しては別に気にしていない。一応、言うけど強がりではない。変わらぬ歩調で進んでいく。するとまた今度はゴスロリの衣装を着た新手のメイドが愛嬌を振りまいていた。さつきと同じように通り過ぎたが彼女も同様に此方に視線を向けないままその他大勢の人達に声をかけていた。あの時はずいぶんうろたえていたな。雄一は少し過去のことを思い出して笑つた。

「この出来事は偶然と片づけてもいい。人間は完璧じゃない。一人や一人程度見逃すのだつて不思議じゃない。でも雄一はこれは偶然ではなく、必然なのだと決定事項として認めている。何十回と繰り返しても結果は変わらないのだから。彼女らに気付いてもらう方法もなくはないが営業スマイルを見る。それだけを目的にするのは抵抗がある。難しい訳でもないんだけど。

何店舗か電器屋を梯子してお手当ての生活家電（掃除機、冷蔵庫）を満足のいく値段で買った。つまり安い値段。新製品が販売され、一個前の型落ち品をゲットした。

自分はどうやらかと言えば僕約家なので一般的な機能があり、長持ちしてくれればいいと思ってる。ただ今日の買い物は少し奮発したかもしない。2週間ぶりで興奮でもしていたか。そういえば自宅で読書三昧で過ごす。これは止めて正解だった。突然、冷蔵庫が壊れた日にや大変だろう。特に冷凍ものが。そもそも半引きこもり生活の僕には無駄ってほど時間があるのでからいつでも本なんて読めるんだし。しかし、この生活を僕が望んでやっている。そう理解だけはされたくない。僕の悩みは分からないだろうけど辛いんだ。

必要な品物は得られたのでは自由時間に移行。ゲーセンで音ゲー等をプレイし、電気街口の近くにあるアニメグッズを多数取り揃えた店に寄つて大量の荷物と共に自宅へと戻つた。帰つてそういう片づけもそこそこに僕はソファーに寝こんだ。帰途の最中は平氣だなどいつも発生する特有の倦怠感が無い事実に嬉々としていたが、しかしそれは勘違いにすぎなかつたようだつた。自宅に着くなり、それは体に表れ、また疲労感もあつた為かすぐにダウンする羽目になつてしまつた。

雄一としては人とかかわることで起つて影響を少なくしたい気持ちが強かつた。そうすればもっと行動の範囲が広がる。しかし、何年も付き合つているこれが雄一は未だ、満足に理解できていなかつた。

携帯が鳴つている。ソファーから体を起して伸びをする。あれから眠つてしまつたようだ。日は

とつぶに沈んで部屋は暗闇に包まれている。ジーパンのポケットに

手を突っ込み携帯を取りだした。

「はい、もしもし」

暗闇の中を手探りで進み、部屋の明かりをつけた。相手の確認もせずに出たが、予想はついている。

「よう、雄一。お前さつきまで寝てただろ。何か情けない声だつたぞ」

「うん。正解だけど情けない声つてそんな声でてたかな」

思った通り。城山晴義。雄一の父親の兄だ。年齢は確か47歳で雄一の父とは2歳離れていたはず。

「ああ、でてたぞ。それに誰が聞いても寝起きと分かるだろうな」伯父は気さくな人物で見た目も若々しい。会社内でもいい社長としてやつてるに違いない。株からの投資事業に成功し、飲食店を都内で何店舗も展開。実に順調な様子でまだまだ事業拡大へと進むに違いない。ちなみに父も共同経営で副社長として働いていた。

「で、伯父さんはどうしたの？」

「おう、お前あと一週間で誕生日だろ。それで欲しいもんでもやうつかと思つてな。あとは無事に生きているかどうかの確認だ」

携帯から伯父のでかい笑い声が聞こえる。前回も同じやりとりをした気がする。

「無事も何もちょくちょくメール送つてくるじゃない」

「そりゃ、いえてるな。でもいいじゃねえか、俺からいわせりやお前は息子みたいなもんなんだ」

最後の方は少し普段と声色が違つていた。その言葉は本当にうれしい。

「それで何がいい?言つとくが女は無しだぞ。もしお前のあれがなければ紹介してもよかつたんだが。童貞も卒業したいだろ?」

おちよくるように大声で笑つてゐる。伯父が僕の状況を理解してくれて助けてくれるのは有り難いが今の言葉は心に刺さつた。僕も彼女ぐらい作りたいが、難点がありすぎる。

「もう僕だつて20歳なんだからわざわざこよ

と一応、断わりはするが返つてくる返事の見こしはついている。

「別に気に済んなよ。お前、俺の会社に結構、貢献してるんだぜ」  
貢献ね。内容を思い浮かべて苦笑する。雄一はよく伯父の雑言等を聞かされている。主に仕事関係、

時に女性関係 - - キヤバクラの女の子とかサービスについて - -

- のだが伯父曰く、雄一は聞き上手で

話し終えた後、非常にスッキリするんだと。その後の展開は分かつてくれるだろうか…。伯父経由で

専務辺り?の人から電話があつた。これは無理矢理掛けさせられたに違いない。最初はその人物も渋々といった口ぶりでぼつぼつと喋っていたのだが、後半はヒートアップして大変だった。名前は岩井だつたか、その人物もほぼ一方的なやり取り後は伯父と同様の状態で満足したらしく、彼からまた他の人へ話しが流れ、その連鎖によりまたたく間に僕は伯父の会社のはけ口役で機能、活躍していた。ある意味、会社の実情に関して誰よりも深く知っている自負がある。はけ口役は楽しいが辛さが伴う。

時に嫌厭もするが、それでも誰かの役に立てると感じじられるから続けられる。

「雄一それにな、浩一達が亡くなつた口にお前は俺に遠慮すんないと約束したじゃねえか。今まで受け取つただろ。親が子供を祝うのに年齢は関係ないしな」

伯父の言い様はさながら実の息子に対するよつて自然と雄一の口元には笑みがこぼれていた。

「分かつたよ、有り難くもらつとくよ。でも、まだ欲しい物とか考えつかないからあとでもいい?」

「おう、いいぞ。よく考えとけ。決まつたら連絡くれよ

「うん。じゃあ近いうちに電話するから

伯父との通話を終え、携帯をテーブルに置いた。そしてまたソファーに倒れこむと同時に盛大な溜め息を漏らした。頬りきりな生活への自己嫌悪。だがどうにもできない無力感。いやそれは間違いか。確かに選択肢や不都合な部分は多い。自分は甘えてい、楽で怠惰な日常に。人とあまり関わらなくて済む仕事も探せばいくらでもあるだろう。すでに自宅で働く職種も考え付く。

暗澹たる気持ちのまま風呂に向かう。気分が紛れればいい。解決にはならないただの先延ばしだとしても。

服を洗濯機に放り込み、風呂場に入る。熱いシャワーを頭から浴びた。動かすに深呼吸をする。何分かすると次第につつつつした気持ちが薄れていった。

精神的にも安定した所で自炊をして食事を済ました。簡単な炒め物やらカレー、シチュー程度しか作らないんだが。料理レシピサイト等で一時は凝った物も挑戦した。出来は満足したけども手間を掛けたのに朝晩の三食を独りだけで食すのが空虚に感じたのと同時に勿体無く思つた。食に拘りがあり、幸せを得られれば文句は無いがとりあえず僕は食通な訳でもないし、腹を満たせて栄養もとれる現在の食事面は申し分ない。正直な話し金銭的にも優しいし。

今は2階の寝室のベットにいる。就寝まではぼんやりと過ごした。惰性でバラエティ番組をつけ、流し見しつつ漫画やパソコンに手をつける。ここまで行動を改めて振り返つて見るとやはり自堕落な生活だなど自嘲した。何回目だろう。痛切に感じているのに関わらず事を成すことがないのは。

僕には癖ともなつていて深呼吸をして思考を遮つた。半鬱状態に

なるだけで悪い影響のみ。ポジティブにいこう。ひとまず伯父から何をもらおうかと候補を脳裏に浮かべていった。そして雄一はその過程でまどろみ深い眠りへと落ちていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4889ba/>

---

交われない僕等

2012年1月13日15時53分発行